

ふるさと阪谷をよくする会

1 基本データ

○地区人口 1, 595人 (H25.1.1 現在)

男767人：女828人

○面積 36.28km²

○地区の沿革

阪谷地区は大野市の北東部、白山山系の経ヶ岳の麓に位置し、西は九頭竜川を挟んで富田地区、北は勝山市、東は五箇地区に接している。

集落は18。昭和29年の町村合併により、阪谷村が大野市となる。

標高250m～500mの中山間地域で、大野市の中でも雪が多い地区である。

面積の3分の2は山林である。農地は圃場整備が進み、広大な棚田となっている。

六呂師高原には、広さ220ヘクタールの奥越高原牧場、自然保護センター、青少年自然の家等の県の施設やミルク工房奥越前等の市の施設を有する。

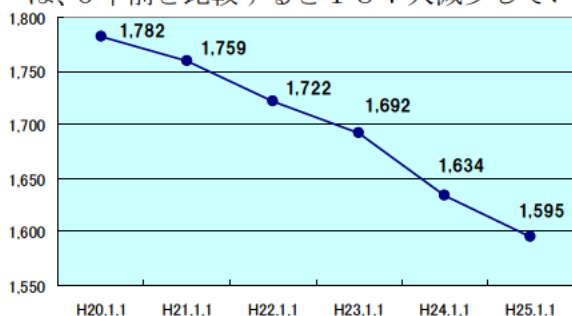
平地より気温が1度から2度低く、経ヶ岳(標高1,625m)から吹き下ろす冷たく強い山風は、虫を追い払うのに効果があり、昔から有機栽培の土壌が培われてきた。そんな土地柄もあり、平成12年「スターランドさかだに」の建設を機に「家庭菜園の味グループ」等、有機農業グループが活動を開始し、更に平成20年度には、国の「地域有機農業推進補助事業」の認定も受け、本格的に有機の里づくりが始動した。

○実施主体 ふるさと阪谷をよくする会

2 現状と課題

(1) 人口減少

年々人口が減少しており、平成25年の人口は、6年前と比較すると187人減少している。



基準日	人口	前年との比較
H20.1.1	1,782	△46
H21.1.1	1,759	△23
H22.1.1	1,722	△37
H23.1.1	1,692	△30
H24.1.1	1,634	△58
H25.1.1	1,595	△39

減少の内訳を見てみると、出生は6人と少なく若い世代が少ないことがうかがえる。また転出は27人で、転入は19人となっており、若い世代の流出がうかがえる。

H24.1.1～H25.1.1 1年間の人口増減の内訳

転入	出生	転出	死亡	転居	人口増減
19	6	△27	△32	入3 出△8	△39

地域の担い手となっている高齢者も高齢化はうち止まり傾向で、自然減少はこしばらく高い割合で継続されていくであろう。

そんな中、人口減少を補う手段として、交流人口を増やすことが、地域の元気継続のキーワードになってくると思われる。

いかに他地区に誇れる産業、イベント、文化を創造し、活性化させて、生産人口の流出を食い止めるか、いかに交流人口を増やし地域を活性化させるかが課題である。

(2) 点在する観光施設と息づく山村の暮らし

地区内には、農業体験やそばうち体験ができる「スターランドさかだに」をはじめ、多くの体験施設、観光施設が立地している。



また、脈々と受け継がれた田畑を守り続けている知恵深きお年よりが多数暮らしている。これら体験施設、観光施設と人的財産を結びつけたエコツーリズムが今後阪谷地区の活性化のキーポイントになってくると思われる。

そのためには、地区内各施設の連携と交流に対する意識の啓発、さらに魅力的な体験プログラムの開発が必要である。

(3) 近隣の観光地から車で30分以内の距離

大野市街地、勝山市、和泉地区から車で30分以内の当地区。このような恵まれた立地条件を生かし、まず、大野市街地、勝山市、和泉地区に來られた観光客に阪谷に立ち寄っていただきたい。そのためには、安心安全な「有機の里」としていかに「阪谷」という名をブランド化し知名度を上げていくかが今後の課題である。

3 事業の内容

昨年に引き続き、①有機の里づくりと②陶芸の里づくり、③加工品の開発に取り組んだ。

①有機の里づくり

有機の里阪谷の魅力を手感できる体験ツアーとして、7月に「こだわり野菜を食するつどい」に合わせて、県内観光会社企画の日帰りバスツアーが開催された。



こだわり野菜を食するつどいの様子

また、10月に「阪谷の魅力!体験ツアー」と題して、1泊2日のモデルコースを実施した。



「阪谷の魅力!体験ツアー」の様子

②陶芸の里づくり

自主グループ「越前おおの阪谷桃木窯」を中心に引き続き、毎月第1・3金曜日に中村鐵遷氏(勝山市在住)を講師に招き陶芸教室を開催した。陶芸作大野市文化祭、阪谷地区文化祭に作品を出品した。



陶芸教室の様子

今年度は、昨年購入した大型の陶芸用窯の設置場所を整備した。



陶芸窯の搬入

③加工品の開発

スターランド特産加工部会が中心となり、阪谷地区内で生産されたこだわり野菜を用いた加工品開発を繰り返し実施した。



スターランド特産加工部会会議の様子

また、物産展や商談会に参加し、その会場で加工品の試作品のモニタリングを実施した。

昨年度、商品化したそば菓子「そばつつえる」では、結婚式用プチギフトとしてラッピングを工夫し、販売した。また、大豆のお菓子「まめずきん」では、きな粉、黒糖、青海苔の3種類に加え、胡麻、塩味の商品を新たに開発し、販売した。



結婚式用にラッピングされた「そばつつえる」

研修会への参加や視察研修の実施し、試行錯誤しながら加工品の開発と販路拡大に向けた取り組みを行った。

4 事業の成果

有機の里づくり

「こだわり野菜を食するつどい」が観光社の企画ツアーに組み込まれ、商品として認められつつある。継続的にツアー企画とタイアップしていくためには、まだまだ課題解決に向けた取り組みが必要である。



行列ができるランチバイキング

していたため、参加者が少なかった。阪谷の特徴を活かした体験メニューは、参加者から喜ばれ、満足していただくことができた。

県内ニーズとしては、日帰りの体験メニューを充実させた方がより効果的であることがわかった。



体験メニュー「阪谷岩めぐり」の様子

陶芸の里づくり

陶芸室の開催により、陶芸作りの技術が向上した。大野市文化祭や阪谷地区文化祭に作品を出品するなど創作意欲が高かった。



陶芸作品の展示（阪谷地区文化祭）

陶芸の里拠点施設の整備が進み、阪谷地区で本格的な陶芸作りに向けた準備ができた。

趣味の作陶の範疇を超え、土産品としての活用、こだわり野菜を食するつどいやスターランドさかだにそば処の器としての活用、阪谷での体験メニューとしての活用等、関係者の士気が高まった。



1 陶芸窯の設置

商品化した「そばつつえる」「まめずきん」を中心に阪谷の農産加工品が、広く知られるようになった。「まめずきん」は、石川県山中温泉の土産店の依頼を受け、新商品を開発し、販売することとなった。



山中温泉の土産店に並ぶ「まめずきん」

また、餅などの既存の加工品についても工夫を凝らし、付加価値を付けた商品として販売を行うことで、販路拡大に貢献した。



野菜で色付けした餅の販売

経営分析、マーケティングなど経営に関する研修に積極的に参加するなど、経営面での資質向上が図られた。

5 今後の展望

「有機の里づくり」においては、地区内並びに奥越地区内施設と連携した体験ツアーが季節ごとにそれぞれの形態で実施され、交流人口が増え、加工品、特産物の販売による消費が生まれ、地区内が活性することを期待したい。

そのためには、正確にニーズを把握することが重要になってくる。継続的にアンケートを実施し、累積、分析し、的確にニーズを探ってい

かなくてはならない。

さらに、質を高めるためには、地区住民の「おもてなしの心」の醸成が大切であり、「おもてなしの心」の育成には公民館を中心とした社会教育が重要になってくる。

「陶芸の里づくり」においては、いよいよ拠点施設が整備され、陶芸作りが体験プログラムの1つとして交流人口増加の一翼を担いたい。

さらに、将来的には土産品としての活用、こだわり野菜を食するつどいやスターランドさかだにそば処の器としての活用できるよう、技術向上を図っていく。また、阪谷で採れた土を利用した「阪谷焼」の研究・開発も検討したい。

「加工品の開発」においては、商品化した「そばつつえる」と「まめずきん」を中心に加工品の販路拡大に向け、商談会や各種イベント、物産展に積極的に参加していきたい。



「そばつつえる」「まめずきん」の販売

また、阪谷産農産物の確保し、安定した加工品の製造を行うため、昨年に引き続き農家へ作付の呼びかけを実施していきたい。

有機の里阪谷の農作物がブランド化することで、さらに需要が高まり、農業所得が少しでも高まることを期待したい。

交流人口が増え、消費が生まれ、産業が生まれ、市民力が高まり、地域が元気になる。阪谷地区では「有機の里づくり」をキーワードに「こだわり野菜を食するつどい」「こだわり農産物の加工品開発」「陶芸づくり」など地域の活性化に向けた取組みを継続して実施したい。